

【論文】

特集：言語教育学としてのライフストーリー研究

「言語教育学としてのライフストーリー研究」において
調査者の構えを記述する意味

「在日コリアン」教師の研究からの示唆

田中 里奈*

概要

本稿は、筆者がこれまで行ってきた在韓の「在日コリアン」日本語教師のライフストーリー調査での経験を批判的に問い直すことを通じて、「言語教育学としてのライフストーリー研究」のあり方を論じるものである。「日本語教育を専門とする日本人」が「在日コリアン」を研究対象とすることにどのような意味があるのかという問いかけをきっかけに、筆者のライフストーリー研究やその記述に対する姿勢がどのように変化したのかを取り上げ、研究者のポジションナリティを記述しない「言語教育学としてのライフストーリー研究」が内包する問題点と排除してしまいうる研究の可能性について述べる。

キーワード

研究者のポジションナリティ、ライフストーリーの記述、自己言及、
調査者の「構え」、 「在日コリアン」日本語教師

1. 本稿の目的

近年、日本語教育の領域でもライフストーリー法（桜井，2002）を用いた研究が数多く行われるようになってきた。2013年5月の日本語教育学会においては、日本語教育の領域では初めてとなるライフストーリー研究をテーマとしたパネルセッションが生まれ議論が行われたように、ライフストーリーを用いた研究への関心は高まってきているといえるだろう。しかしながら、三代（2013）も指摘しているように、日本語教育学研究の領域において行われているライフストーリー研究の多くは、研究対象をいかに解釈し、“正確”に記述するかということに力点が置かれてきた。研究者が語りを聞き取り、解釈し、記述していく際に、研究者自身はその調査にどのように関わり、ライフ

ストーリーの構築に貢献していったのかといった調査者の位置づけは不問とされてきたのである。また、研究者がどのようなポジションナリティからライフストーリーの構築に参加しているのかといった点も自覚化されてきたわけではなく、研究者のポジションナリティや調査の経験について自己言及がなされるライフストーリー研究が行われてきたとは言い難い。

しかしその一方で、社会学の領域などにおいては、ライフストーリー研究における調査者の経験を自己言及的に記述することの重要性が指摘されている。例えば、石川（2013）は、その方法論的意義として、調査協力者の経験の理解可能性が高まることや研究成果を読む人々にまで追体験の可能性を広げることをあげている。また、社会の構成員である調査者自身をも研究対象に含めることで、調査者と調査対象者とが共に生きる社会を明らかにしつつ、問い直すことが可能になると論じている。石川のこうした指摘は、言語教育学にお

* 山口福祉文化大学
(Eメール：t_riina0917@hotmail.com)

けるライフストーリー研究について考える際にも多くの示唆を与えてくれると思われる。それでは、「言語教育学としてのライフストーリー研究」において、自己言及的な記述を行うことにいったいどのような意味があるのだろうか。

以上の問題意識に基づき、本稿では、筆者がこれまでに行ってきたライフストーリー研究における経験を批判的に問い直し、「言語教育学としてのライフストーリー研究」のあり方について論じていく。筆者のライフストーリー研究やその記述に対する姿勢がどのように変化したのかを取り上げ、研究者のポジショナリティを記述しない「言語教育学としてのライフストーリー研究」が内包する問題点と排除してしまいうる研究の可能性について述べる。

2. ある問いかけがもたらした研究スタイルの変化——〈日本語教育を専門とする日本人〉が「在日コリアン」を対象とする意味をめぐって

ここでは具体的に、これまで取り組んできた「在日コリアン」教師のライフストーリー研究を事例として取り上げ¹、ある「問いかけ」をきっかけに筆者の研究への向き合い方がどのように変容していったのかについて言及する。

2. 1. 「在日コリアン」教師のライフストーリー研究

筆者は2009年より、在韓「在日コリアン」²日本語教師のライフストーリー研究を行っている（田中2011a, 2011b, 2013a, 2013c）。ここでいう「在日コリアン」の日本語教師とは、日本で生まれ育ち、成人した後、「帰韓」³して日本語教育に携わっている／きた人々で、これまでに計18名

1 ここでは田中(2013a, 2013c)で取り上げた2名のライフストーリーを部分的に抜粋する。詳細は田中(2013a, 2013c)を参照のこと。

2 日本での国籍表記の如何を問わず、日本に居住している／いた人で朝鮮半島に民族的なルーツをもつ人々を示す総称とする。

3 日本に居住していた「在日コリアン」が民族的ルーツのある韓国で中・長期的に住むことを目的に渡ることを意味することとする。その際、日本の特別永住権の保持は問わないこととする。

の教師たちに対して、一人につき1～5回のインタビュー調査を実施してきた。そして、日本語を「母語」として身につけた「日本語のネイティブ」教師ではあるが、国籍や血統的には「日本人」とは見なされない彼らが、韓国の日本語教育の現場においてしばしば難しい立場に立たされてきたことを明らかにしてきた。

例えば、日本語教育において本名である韓国名を名のっている教師の事例（教師V）では、国籍・血統的に「非日本人」であるために「日本語のネイティブではない」と見なされてしまうことに葛藤する教師の姿を明らかにした。そして、その状況を回避するために、自身が「在日コリアン」であることを意図的に他者に提示するといった試みが行われていることを描いた。「日本人」により近い存在であることを示すことで、日本国籍と日本名はもたないが、自分は「正統な日本語のネイティブである」ということを表明し、日本語教育のなかでの自身の位置を何とか確立させようとその教師はしてきたのである。

その一方で、通称名である日本名を名のって教壇に立つことが求められた教師の事例（教師E）では、日本語教育という空間において、「日本人＝日本語のネイティブ」という教師のポジションを維持し続けるためにも、通称名使用が選択されていることを明らかにした。通称名をあえて使用することにより、日本語教育の現場で「十全」な「日本人」を装うことが可能となり、「ネイティブ教師」として重宝され、教育現場での確固たる立場を確立させてきたのである。

筆者は以上のような教師たちの事例をもとに、「在日コリアン」という「カテゴリー」や通称名を操作的に、戦略的に用いることで、「日本人」により近いことや「日本人っぽさ」を演出することが可能となっていること、また、そうすることで「日本語のネイティブ」教師としてより価値づけられる現実があるということを指摘してきた。そして、筆者は、そうしたライフストーリーの解釈を通じて、その根底には「日本人の日本語」が「正統な日本語」として認識されてしまっているという前提が共有されていること、また、言語、国籍、血統の同一性を求める「単一性志向」があることを指摘してきた。このように、筆者は、従来の研究ではなかなか可視化されることがなかった彼らのライフストーリーにスポットライトをあてること

を通じて、彼らが従事している日本語教育が内包している問題を逆照射しようと試みてきたのである。

2. 2. ある問いかけとの遭遇と記述することへの躊躇

しかしながら、こうした研究を関連領域の学会などで報告する際、筆者はしばしば次のような問いかけ——「〈日本語教育を専門とする日本人〉のあなたが〈「帰韓」した「在日コリアン」〉を研究対象とする意味をあなたはどのように捉えているか」——に遭遇してきた。このような問いかけは筆者にとって非常に悩ましいものであり、「在日コリアン」教師のライフストーリーを描くことを通じて日本語教育が抱える問題を指摘するという自身の研究スタイルに強い違和感を次第に覚えるようになっていった。そして、ライフストーリーをまとめていくという作業にも躊躇するようになっていったのである。では、筆者に向けられた問いかけには、いったいどのような意味が込められていたのであろうか。

まず、この問いかけは2つの解釈が可能だと思われる。その1つは、「日本語教育を専門とする者が『在日コリアン』を研究対象とする意味とは何か」というものだと思われる。今日では日本語教育の受け手となることが少ない「在日コリアン」を、日本語教育学研究の対象とすることに果たして意義があるのかといった疑問が持たれたのだと思われる。そして、もう1つは、「『日本人』が『在日コリアン』を研究対象とする意味とは何か」というもので、「日本人」である筆者が「在日コリアン」のライフストーリーを論じることの意味、つまり、研究者のポジショナリティにかかわる問題が問われたのだといえよう。

1つ目の問いに対しては、日本語教育において「在日コリアン」を研究対象とする意義を明確化することで対応できると考えられる。「日本語のネイティブ＝日本人」、「日本語のノンネイティブ＝非日本人」という従来の二項対立的な図式では捉えきれない「在日コリアン」の言語経験や日本語教育経験を捉えることにより、「日本語のネイティブ＝日本人」、「日本語のノンネイティブ＝非日本人」という図式を攪乱させていくための新たな議論の構築の可能性を研究の意義として主張す

ることができるだろう⁴。

しかし、難問なのはもう一方である。「日本人」であり「在日コリアン」ではない「非当事者」である筆者が「在日コリアン」を対象とする研究を行うことにどのような意味があるのだろうか。質問者たちが発したことばのニュアンスから言ってみれば、単に、どのような意味があるのかを尋ねたのではなく、「当事者」ではない筆者が、知られざる「帰韓」した「在日コリアン」のライフストーリーを明らかにしようとするスタンスに暴力性はないのか、といった批判が込められているようにも感じられた。

当時の筆者にはこのことに対する明確な答えは準備できておらず、「『在日コリアン』のライフストーリーや葛藤、苦悩などを論じることができるのは『在日コリアン』だけだ」としてしまおうことの方にむしろ問題があるのではないかと議論をスライドさせた。そのように考えてしまうことの方が、「『在日コリアン』の葛藤や苦悩は『在日コリアン』の問題だ」と議論を狭めることになり、むしろ問題を含んでいるのではないかと切り返したように記憶している。ある問題を語る資格をもつ者はその研究対象とする人々と同じ属性をもつ「当事者」のみだとしてしまうことは、「『在日コリアン』のことについては『在日コリアン』にしか語ることはできない」といった論理の成立に繋がる。そして、そうした論理は、議論している内容を「在日コリアン」固有の問題として片づけてしまう状況をつくり出しかねない。

しかし、こうした問いかけに何度か遭遇するたびに、質問者たちが本当に指摘しようとしていたことは、実は、もう少し違うところにあったのではないかと考えるようになっていった。それは、「『在日コリアン』の問題を、『日本人』のあなたには語ることはできない」という批判だったのではなく、むしろ、「在日コリアン」の問題に取り組む筆者の向き合い方への批判だったのではないか。それは、筆者による「在日コリアン」教師たちのライフストーリーの記述が、彼らのストーリーの詳細な記述とそこから導き出される解釈、そして、それらを通じて照らし出される日本語教育という文脈における問題に限定されていたことに対する遠まわしの批判だったのではないか。

4 この議論に関しては、田中(2013b)を参照のこと。

興味本位ということばは適切ではないにしても、「在日コリアン」教師のライフストーリーがこれまで可視化されてこなかったものであったから、筆者が強い興味と関心をもって研究調査を続けてきたのは事実である。そして、「当事者」ではない筆者が、「在日コリアン」教師という「カテゴリー」に入る人々からライフストーリーを聞き取り、研究調査のなかから次第に見出された分析・考察の観点をもとに、教師たちのことを記述し、そこから明らかとなった日本語教育という文脈における問題を研究成果として報告してきたのも事実である。だとすれば、そうした研究報告を聞いた人々が、ある問題を指摘するために、教師たちの語りを筆者が一方的に「利用」していて暴力的だと認識してしまうことは十分に考えられる。だからこそ、「当事者」ではない「日本人」のあなたが「在日コリアン」を研究対象とすることにどのような意味があるのかが問われたのではないかと思われる。

それでは、ライフストーリーを聞き取り、記述することに対する政治性や暴力性に一体どのように対峙していくことができるのであろうか。筆者が今から「在日コリアン」となって、研究対象と同じ属性をもつ「当事者」になることは不可能であるし、そもそも、こうした問題は、必ずしも「当事者」であれば回避できるようなものでもないと考えられる。在日朝鮮人のライフストーリーにおける「当事者性」の問題について論じた李(2010)においても、「当事者」という「カテゴリー」に甘んじて研究に臨むことで、「当事者」であっても他者を知らないうちに差別し抑圧する可能性が十分にあることが指摘されている。問題なのは、ある研究対象となる人々と同じ属性をもつか、もたないか、ということではないのではないか。このような筆者に向けられた鋭い問いかけにより、筆者はライフストーリーの前で身動きができなくなってしまったのである。

2. 3. 「調査するわたし」の経験も含めたライフストーリーの記述

こうした状況に風穴を開けてくれたのは、インタビューデータの記述に関する議論であった。

好井(2004)は、インタビュー調査において、研究対象を、ある「カテゴリー」にあてはめることなく実行することは不可能だと指摘している。た

とえ可能であるとしても、「カテゴリー」化してしまう姿やそこに潜んでいる前提などとの“格闘”を経て、初めて到達できる可能性が残されているといったものであり、「カテゴリー」化してしまうという営み自体は必然であると論じている。しかし、そこで重要なのは、次のようなことだという。

問題は、相手にあてはめようとしているカテゴリーが、どのようなかたちで「わたし」のなかに位置づいているのか、カテゴリーがいったいどのような前提、どのような問題「理解」のなかから出てきているのか、そのカテゴリーを使用することに対して「わたし」はどのように評価しているのかなど、いわば、「わたし」のカテゴリー理解のありようであり、「わたし」が自明視してしまっているカテゴリーをめぐる意味内容の批判的検討であろう。(好井, 2004, p. 15)

重要なことは、「カテゴリー」化をしてしまうか否かではなく、ある「カテゴリー」を用いることやそれに調査協力者をあてはめること、そして、あてはめることで調査協力者の語りを理解しようとする「調査するわたし」の営みに徹底的に敏感であることだという。また、調査協力者からの違和感の表明や抗いの語り、皮肉などのさまざまな反応を察知することなのだという。研究対象について観察し、それを淡々と記述するのではなく、インタビューの場における調査協力者とのせめぎあいやすれちがい、しのぎあいなどのやりとり自体を解読し、「調査するわたし」自身のフィールドワークでの経験を記述することの重要性を好井は説いているのである。

李(2010)は、こうした好井の「調査者である私の経験を記述する」という方法論によって、フィールドワークの暴力性と調査者と向き合う様までもが記述の対象となり得ること、そして、フィールドワークの暴力性を超克する一つの可能性になることを指摘している。そして、こうした「調査者である私の経験の記述」は、読者が依拠する「自明の前提」に疑問を投げかけるという形で、読者を対話的空間へと導くと論じている。

〈日本語教育を専門とする日本人の筆者〉が〈「帰韓」した「在日コリアン」〉を研究対象とする意味をどのように捉えているか、という問いかけ

自体に、以上論じてきたような、フィールドワークの暴力性やライフストーリーを書くことの政治性への批判が含まれていたのかどうかはわからない。また、「日本人」というポジショナリティからの発話を意識し、記述のあり方を見直させる意図があったのかどうかは実際のところはわからない。しかし、この問いかけは筆者のライフストーリー研究への向き合い方や記述のあり方を大きく変化させたことは事実である。

3. 「調査するわたし」が内包している前提

それでは、筆者が取り組んできた日本語教育における「単一性志向」の問題は、果たして、「調査するわたし」から完全に切り離されたところに存在するものなのであろうか。好井や李が論じているように、フィールドワークの暴力性、ライフストーリーを書くことの政治性に向き合うには、調査協力者を客観的に記述することに留まるのではなく、「調査するわたし」の経験の記述も含めることが重要な意味をもつ。そこで、以下では、まず、冒頭で紹介したライフストーリー研究を振り返り、筆者がどのように調査に臨んできたのかに言及する。

3. 1. インタビューを振り返る

まず、日本語教育において本名を名のっている教師Vの事例では、「在日コリアン」という「カテゴリー」を意識的に表明することによって、「日本人のような日本語」が操れる「日本語のネイティブ」というポジションが獲得されてきたことを筆者は明らかにした。しかし、その一方で、教師Vは、日本語教育以外の空間では、基本的には、「在日コリアン」という「カテゴリー」自体を懐疑的に捉えるスタンスをとっており、また、「日本人」ではない自分の「母語」が「日本語」であるということから、「『日本語』の話者として『日本人』のみを想定すること」や「唯一の『正しい日本語』として『日本人の日本語』を求めること」にも疑問を抱いていた。このような教師Vの矛盾した態度はいったい何を意味していたのだろうか。

教師Vは、韓国籍をもち、韓国名を名のって教壇に立っているがゆえに、「韓国人教師」としてカテゴライズされてしまうか、「理解されにくい存

在」として排除されてしまうことが多かった。そうした状況のなかで、「日本語のネイティブ」教師という「カテゴリー」に教師Vが踏みとどまるためには、「在日コリアン」教師であることを意図的に表明し、「自分には『正しい日本語』を操るスキルがある」、「韓国名や韓国籍をもってはいても、自分は日本語のネイティブなのだ」、ということ周囲に認識させることが必要だったのである。教師Vは、言語、国籍、血統との間にズレをもち、「日本語=日本人」という図式に収まりきらないからこそ、「正しい日本語」や「日本語のネイティブ」であることをむしろアピールし、「日本人」ではないが「日本語のネイティブ」である自分をより価値づけるために、「日本語=日本人」という図式の近くに自身を位置づけ直し、自らのポジションを守ろうとしてきたのである。

しかし、「日本語のネイティブ」であることをやたらと表明しようとする教師Vのこのような語りには違和感を覚えつつも、筆者は、それが本当に意味していることにはなかなか気づくことができなかった。言語、国籍、血統の一体化が求められてしまう空間だからこそ、その一体化の図式に少しでも近づくために「在日コリアン」であることを強調してしまうという事情を理解するのに非常に長い時間がかかってしまったのである。「日本語のネイティブ」だが「非日本人」である教師が、「日本人のような日本語」を重視するのはなぜなのか。また、そのような「日本人の日本語」ではない「日本語」の存在を積極的に打ち出すことに躊躇するのはなぜなのか。インタビュー調査の終盤に差し掛かるまで筆者には理解不能であり、教師Vの真意を汲み取ることがなかなかできずにいた。口では「日本語」の話者として「日本人」のみを想定することに違和感があると言いつつも、結局のところ、教師Vは、「日本人の日本語」に正統性を与えてしまうような考えから抜け出すことができず、「日本語のネイティブ」である自分自身を結局優位な立場に位置づけたいだけなのではないかと苛立ちすら感じてしまうこともあった。このように、教師Vが置かれている状況に対する筆者の理解はまったくといってよいほど十分ではなかったのである。

同様に、通称名を使用している教師Eとのインタビューにおいても、やはり、筆者の気づかなさ、鈍感さは至るところで散見された。

教師 E は、所属している韓国の大学院では本名を、日本語教育の領域では通称名を使用するといった 2 つの名前の完全な使い分けを行っている。渡韓する 7～8 年前から本名を名のってきた教師 E が韓国で通称名を再び使うようになったのは、日本語教育機関から通称名使用の要望があったからだという。しかし、教師 E は、通称名でなくても働ける教育機関に移ってから、自分のキャリアのために、通称名使用を自らでも選択するようになっていった。こうして、「日本人の日本語のネイティブ」教師であると完全にカムフラージュすることに教師 E は成功していったのである。自身の日本語がもっとも評価される形態で自分を周囲に見せるためにも、通称名を完全に取り外し可能なものとして割り切って使用しているのだと筆者は解釈していた。

しかし、その一方で、なぜ、「日本語のネイティブ」だが自分は国籍・血統的には「非日本人」であるということを表明することに教師 E は躊躇してしまうのだろうかという疑問も抱いていた。名前の使用に制限がない職場に移ってから通称名を使用し続けるという教師 E の語りに筆者はどこか違和感を抱き続けていたのである。教師 V と同様に、そうした行為は、結局本人が「日本語のネイティブである」ということを特権として保持したいと望んでいることの表れでしかないのではないかといった疑念さえも抱えてしまっていた。

しかし実際には、教師 E の通称名使用は、本名を使用してしまったら自分が教育機関側からも学習者からも「日本語のネイティブ教師」というまなざしでは見てもらえなくなり、自分の教師としての価値が低下してしまいうる可能性を憂慮しての選択だったのである。筆者がこうした教師 E の真意を見落としてしまっていたということは、通称名を用いることで「ネイティブ」に「なる」ことを選択せざるをえなかった教師 E の葛藤に対する理解がいかにも不十分であったか、そして、想像力がいかにも欠けていたかということの間接的に示しているように思われる。

このように彼らとのインタビューを振り返ってみると、そこには、教師たちの語りとどこか矛盾を孕んだ筆者の解釈があり、教師たちの語ろうとしていた真意にはなかなか到達できない筆者の姿があった。

3. 2. 「調査するわたし」がもっていた「構え」

それでは、なぜ、筆者は教師たちの語ろうとしていた内容になかなか到達することができなかったのであろうか。それは、以下のインタビュー記録に表れているように、筆者がインタビューという場にもち込んでいた「構え」や「期待」と密接に関係しているのではないかとと思われる。筆者は、以下のように、インタビュー調査の至るところで、「日本語を母語としているが日本人ではないあなた」が「なぜ、日本人のような日本語を目指す教育を行おうとするのか」といった質問を「在日コリアン」教師たちに投げかけている（*は筆者を示す）。

*： で、その、例えば在日コリアンの先生というのは、ネイティブとして、その、母語として、あの、日本語を学ばれた、まあ、日本語を身につけたということになりますよね。なので、その、「日本語は日本人のもの」というようなものには当てはまらないと思うんですね。だからこそ、その、在日コリアンの先生方の存在というのは、そういった、その一、固定化したその一「日本語＝日本人」といった考え方を、何かこう、変えていく何か原動力になるのではないかなと。その辺りを、先生はどんなふうにお考えなのかなというのを。（教師 V との 2 回目のインタビュー：2009/12/28）

*： 先ほどのその、日本語教育の授業に関してなんですが、韓国の日本語教育は、その一、日本人のように日本語が話せるように、こう、練習をするっていう、何かいろんなそういうのが、結構あるような気がするんですが。その辺り実際に、先生はネイティブでありますけれども、日本人ではなくて、その辺りをどういうふうにご考えながら、日本語を教えているのかなあと。（教師 V との 3 回目のインタビュー：2010/8/24）

*： 教育機関から求められていないのに通名を使用するのはなぜ…。えーっ、日本語のネイティブだけど、日本人じゃないっていう見せ方とかも可能なんじゃないかというか。なんか「日本語は日本人のものだ」みたいなのを変えろとか、そういうのは先生はどう思うのかと思って。（教師 E との 1 回目のインタビュー：2011/8/26）

このように、インタビューの場において調査協力者に上記のような問いかけをしていた背景には、筆者自身のもともとの関心が、「日本語＝日本人」という図式を崩していけるような教育実践を模索していくことにあったという事実がある。また、「在日コリアン」教師のように「日本語のネイティブだけれど日本人ではない」という属性をもってさえいけば、そうした実践が実行可能なはずだといった「期待」があった。筆者は、「在日コリアン」教師たちの語りのなかに、「日本人のネイティブ教師」や「韓国人のノンネイティブ教師」とは異なる、「雑種」な属性をもつがゆえに可能となる、言語、国籍、血統の一体化という考え方を脱構築していく実践の方向性を見出そうとしていたのである。

だからこそ、教師Vが「在日コリアン」という「カテゴリー」を周囲に積極的に表明して「日本人」により近い「日本語のネイティブ」に自分を位置づけようとしていることや、教師Eが通称名を使用して「日本人の日本語のネイティブ」にカムフラージュしようとしていたことの本当の意味とその背景にある文脈に気づくことができずにいた。「日本人」の「日本語のネイティブ」が「日本語話者としての正統性」を見せつけるような場合と同じなのではないかと短絡的に考えてしまっていたのである。

それでは、このような「構え」や「期待」を筆者がインタビューの場にもち込んでいたということは、インタビュー調査においてどのような意味をもつのであろうか。インタビューの場に、こうした「構え」や「期待」をもって臨むこと自体、決定的な失敗だったのであろうか。

桜井(2002)は、調査者の「構え」に関して以下のように論じている。

ここで注意を喚起しておきたいのは、インタビュアーはそうした構えから自由になって無心でインタビューを遂行したほうがよい、と主張したいわけではないということだ。そうではなくて、私たちは意識するしないにかかわらず、またそれが一貫しているかどうかにかかわらず、インタビューに際して一定の構えをもってことを常態であると認め、むしろその構えがどのようなものであるかに自覚的でなければならな

い、ということなのである。(p. 171)

桜井(2002)が指摘しているように、調査者が「構え」をもたない状態でインタビューを遂行することはなく、誰しも何らかの「構え」をもってしまわざるをえない。むしろ、重要なことは、どのような「構え」をもち、どのようにインタビューを遂行したのか、そうした部分も踏まえ、インタビュー調査のプロセスをデータとして開示することだという。そして、ある「構え」や「期待」をもってしているということ自体がいったい何を指し示しているのかを紐解いていくことだと思われる。

4. 「単一性志向」の問題への鈍感さが意味する「単一性志向」の根強さ

それでは、「日本語のネイティブ」だが「日本国籍ではないし、日本名でもない」という属性をもつことによって、「在日コリアン」教師は、「日本語＝日本人」という図式を崩していくような実践を、身をもって行うことができるはずである」といった「構え」や「期待」を筆者がもっていた、ということ自体はいったい何を意味するのであろうか。

教師たちは、「日本語は日本人のものだ」といった「日本語＝日本人」という図式を信望しているわけではないが、その図式にある意味「しがみつ়くこと」によってでなくては、日本語教育の現場で生き残ることが難しいという現実と直面していた。本名を名のって教壇に立っている教師Vも通称名を名のっている教師Eも、言語学的観点からすれば「日本語のネイティブ」だが、国籍や血統という観点からすると日本には属していない。そのため、「日本語＝日本人」という図式からは逸脱しており、その逸脱をありのまま周囲に見せてしまうことによって、言語、国籍、血統の一体化が前提とされる空間では、正当な評価が得られず、ポジションが奪われたり、排除の対象になったりしてしまう。だからこそ、その図式のより近くに自身を留まらせるために、日本に繋がりのある「在日コリアン」という「カテゴリー」を積極的に表明したり、通称名を使用したりする「戦略」がどうしても必要であり、言語、国籍、血統の一体化という「単一性」を兼ね備えていない自身の独自性を前面に出したり、そうした図式を崩すことを

目指したりするような実践は実行にはなかなか移せないと言っていたのである。

しかし、このような教師たちの行動の意味が十分には理解できていなかった筆者は、安易にも、“言語、国籍、血統の間にズレをもつという「単一性」からは逸脱した属性をもっていれば”，つまり，“日本語のネイティブ”だが「日本人ではない」という属性をもっていれば，“日本語は日本人のものだ”といった「日本語＝日本人」という図式の再考を、身をもって学習者に迫っていくことができると考えていた。むしろ、「日本人」で「日本語」を「母語」とする筆者などよりも、はるかに効果的に「単一性」の図式がいかにか虚構であることを示すことができ、その再考を学習者に迫っていけるはずだといった「構え」や「期待」をインタビューの場にもち込んでしまっていたのである。それは、そもそも筆者が「雑種」な属性を「利用」することで、「単一性」の問題を脱構築するための何かができていると想定していたことに起因する。

このことは、「日本語＝日本人」という図式が非常に根強く、それによって困難や葛藤を抱えざるをえない教師たちの置かれた状況に対する筆者の想像力が完全に不足していたことを意味している。そして、それは、筆者が「日本語＝日本人」という図式のなかに、ある意味、「安住」しているからこそ成し得てしまったものであり、「単一性志向」が根強く残る日本語教育という空間において、言語、国籍、血統との間にズレをもつということがいったいどのような意味をもつのかということ自体に対して、筆者の理解がまったく及んでいなかったことを示しているといえる。日本国籍と日本名をもった「日本人」の「日本語のネイティブ」であり、言語、国籍、血統が一体化した「単一性」を筆者が兼ね備えていることは、筆者がそのことに価値を置いているか否かにかかわらず、「単一性志向」の根強さに対する理解の不十分さと鈍感さを生んでいたのである。

ところで、差別問題を論じている倉石（2007）は、差別の現象が観察者や記述者の存在から超然としたところにあるものではなく、日常のなかに埋め込まれているものだという立場から、〈差別の日常〉の解説を行っている。そして、その〈解説〉の際に研究者が行う自己言及は、2つの点において重要な意味があると指摘している。

まず、自己言及をすることによって、よりよい

形で「当事者」像を浮かび上がらせることができるといことである。研究者による自己言及は、「当事者」だけを淡々と描く場合以上に、「当事者」の姿を映し出すことに繋がるというのである。また、「当事者」イコール「マイノリティ」あるいは「被差別者」ではなく、誰でも常に／すでに差別問題の「当事者」であり、社会学的フィールドワークの経験は、ある種の痛切さとともにそのことを自覚させてくれる場であるという（p. 5）。

差別問題を論じている倉石の指摘をそのまま本研究にあてはめて考えることはできないが、非常に重要な指摘がここではなされていると思われる。これまで論じてきた「調査するわたし」への自己言及は、「在日コリアン」教師とのインタビューにおいて、「格闘」してはいるものの、「単一性志向」の根強さという根本問題になかなか気づかないでいる筆者の姿を映し出した。そして、そのことは、「在日コリアン」教師が置かれている文脈を一層照射することになったといえる。

これまでの論考では、「在日コリアン」教師たちが、「日本語のネイティブ」だが「非日本人」であるという「雑種」な属性を隠し、表面的には「単一」な属性をもつかのように演じてしまっている（演じさせられてしまっている）ことから、日本語教育という文脈における「単一性志向」の根強さを指摘してきた。だが、本稿における調査者の自己言及を踏まえると、こうした問題は、筆者と切り離されたところで蔓延っているものでは決してないということが示されたのではなからうか。「単一性志向」の問題を正面から論じようとしている者でさえも、その問題への鈍感さを抱えもっていることは十分にあるということが示されたからである。このことは、こうした問題がいかにか根深く、根強いものであるかということの間接的に指し示しているといえる。

5. おわりに

以上、筆者がこれまで行ってきた「在日コリアン」教師のライフストーリー研究を振り返り、そのなかで、筆者が調査協力者の語りに対する違和感といかに格闘し、解釈を深めてきたのか、その過程を記述してきた。

これまでの研究では、筆者は、日本語教育における言語、国籍、血統に対する「単一性志向」と

いう問題を、単に、ある領域が直面し、抱えている問題としてしか記述することができていなかった。しかし、研究者のポジションナリティが問われたことにより、批判的な自己言及のプロセスを経ることとなった。それにより、言語教育に携わっていて、かつ、その問題を正面から論じようとしている筆者でさえも「単一性志向」の問題を抱えていたということが明らかとなり、いかに根の深い問題であるかを示すことが可能となった。また、言語教育に関わる者として自らで引き受けていくべき問題として捉え直すことにもつながっていった。

これまで可視化されてこなかった人々の声に耳を傾け、彼らのライフストーリーを明らかにしていくことは確かに魅力的なことである。しかし、彼らの語りを単に“正確”に記録していくだけでは、彼らのライフストーリーに、一言語教育研究者としていかに向き合い、戸惑いを覚えたり、理解を深めていったりしたのかを示すことはできず、また、そこから新たにどのような知を掴みとったのかを明確に伝えることもできないと思われる。結局のところ、調査者は「安全」なところからライフストーリーの語り手を捉えることになり、それは、単なる高みの見物に終わってしまうのである。そうなると、ライフストーリーは、特別な誰かが抱えもつ特別な状況、または、ある領域が内包している問題を具体的に示すための事例という位置づけにしかならなくなってしまう。

しかし、彼らのライフストーリーと「調査するわたし」とが交差した地点を記述することにより、一言語教育研究者である調査者自身に、そうした状況や問題の一部を成しているという自覚を喚起させ、いかにその状況や問題に主体的に取り組んでいくのかを意識化させることにつながっていくと思われる。そして、それは、あるテーマを言語教育界または社会全体で共有していくべき問題として議論の俎上にのせ続けていくことを可能とするのではなからうか。言語教育学としてのライフストーリー研究はどのようにあるべきか、そして、その記述をいかに行っていくべきかに関して、今後もさらなる検討をつづけていきたい。

文献

石川良子(2012). ライフストーリー研究における調査者の経験の自己言及的記述の意義 — イ

ンタビューの対話性に着目して『年報社会学論集』25, 1-12.

倉石一郎(2007). 『差別と日常の経験社会学——解読する〈私〉の研究誌』生活書院.

桜井厚(2002). 『インタビューの社会学——ライフストーリーの聞き方』せりか書房.

田中里奈(2011a). 「カテゴリー」化されることへの拒絶とその戦略的利用——在日コリアンとして生まれ育った在韓日本語教師の「日本語」をめぐる語りを手がかりに『移民研究年報』17, 97-108.

田中里奈(2011b). 「日本語=日本人」という規範からの逸脱——「在日コリアン」教師のアイデンティティと日本語教育における戦略『リテラシーズ』9, 1-10. <http://literacies.9640.jp/vol09.html>

田中里奈(2013a). 『言語教育における「言語」, 「国籍」, 「血統」——在韓「在日コリアン」の日本語教師のライフストーリー研究を手がかりに』早稲田大学大学院日本語教育研究科博士論文.

田中里奈(2013b). 日本語教育における「ネイティブ」/「ノンネイティブ」概念——言語学研究および言語教育における関連文献のレビューから『言語文化教育研究』11, 95-111. <http://gbkk.jp.org/vol11.html#tanakar>

田中里奈(2013c). 言語教育における「単一性志向」——帰韓した在日コリアン教師の言語/教育経験とアイデンティティに関する語りから、細川英雄, 鄭京姫(編)『私はどのような教育実践をめざすのか——言語教育とアイデンティティ』(pp. 113-141) 春風社.

三代純平(2013). 日本語教育におけるライフストーリー研究『2013年度日本語教育学会春季大会予稿集』pp. 83-87.

好井裕明(2004). 「調査するわたし」というテーマ. 好井裕明, 三浦耕吉郎(編)『社会学的フィールドワーク』(pp. 2-32) 世界思想社.

李洪章(2010). 在日朝鮮人を研究する〈私〉のポジションナリティ——当事者性から個人的当事者性へ『日本オーラル・ヒストリー研究』6, 57-65.

付記1: 本研究は、筆者の博士論文『言語教育における「言語」, 「国籍」, 「血統」——在韓「在日コ

リアン」の日本語教師のライフストーリー研究を手がかりに』(早稲田大学大学院日本語教育研究科, 2013年)の一部である。

付記2: 本研究は, 科学研究費補助金(若手研究B)「『在日コリアン』として生まれ育った在韓日本語教師のライフストーリー研究」(2012～2014年度, 課題番号24720245, 研究代表者: 田中里奈)の交付を受けて行われた研究成果の一部である。